未来にはばたく君たちに

東京歯科大学衛生学講座　主任教授
杉　原　直　樹

【略歴】

1987年　東京歯科大学卒業
1987年　東京歯科大学大学院入学（口腔衛生学専攻）
1992年　東京歯科大学大学院修了（衛生学専攻）博士（歯学）取得
1992年　東京歯科大学大学衛生学講座助手
1993年　東京歯科大学大学衛生学講座講師
2006年　米国ミシガン大学歯学部留学
2010年　東京歯科大学大学衛生学講座准教授
2014年　東京歯科大学大学衛生学講座主任教授（現在に至る）

1. きっかけや目的はどうでもいい（その後どうするかが重要である）

昔々、ある歯科大学４年生の学生が口腔衛生学の教授から呼び出しを受けた。教授室に入ると教授は怖い顔をしていきなり「口腔衛生学とはどういう学問だ」と質問を投げかけてきた。答えに窮したその学生はとっさに「人間を研究する学問です」と答えた。その返答に対して教授はどう考えていたのかはわからないが「そうだ。その通りだ」と大きく肯定してくれたことを今でも記憶している。その時は口腔衛生学の定期試験、再試験ともに不合格で落第の瀬戸際にあった。この問答をかわしてから40年近くの時が経った。このときとっさに答えたこの口腔衛生学の定義が正しいのかどうかはともかくとして、この瞬間が口腔衛生学の世界に入ることになる出発点であったことは間違いない。

もちろん、最初から立派な目的を持って大学教員や研究者の世界に入ってくる方も多いであろう。私自身はいい加減な答えに耳を傾けてくれ、肯定してくれた教授になんとなく惹かれたというのも本音である。何かを始めるにあたってきっかけは何であろうとよいのである。

ここで、10年前に私が初めて口腔衛生学の教科書を分担執筆させていただいた時のある章の端書きとして書いた文章を紹介する。「口腔衛生学は人間を研究する学問である。単に口の中を観察するだけでなく、その人の行動および社会経済状況を含めた機能までを評価しなければならない。さらに、もう一つ忘れてはならないのが、個人（患者）と集団（地域）を評価する２つの視点を必要とすることである（口腔衛生学2014、一世出版）」。とっさに答えた一言から始まった。

2. 縁を大事にしろ

川喜田二郎が「創造と伝統」（祥伝社）の中で、創造的行為の達成によって、創造が行われた場への愛と連帯との循環である「創造愛」がうまれてくる。これが累積していくと、そこに「伝統体」

が生じると述べている。「伝統体」とは、創造の伝統をもった組織のことである。さらに、この創造愛を発展させるかどうかは「縁」によって決まるのであって、この「縁」は単に与えられるものではなく、与えられるものが半分であって、残り半分は、それを縁として生かすかどうかは主体の側に責任があると述べている。私の学生、大学院、講師時代を通しての恩師は、高江洲義矩名誉教授、そして川喜田二郎の著書を是非読みなさいと薦めてくださった故竹内光春名誉教授である。その他にも講座で出会った方々との縁、そして初めて入会した学会である日本口腔衛生学会での諸先輩方との縁、とこれまでよい縁に恵まれてきた。また、後述する海外留学においてはたくさんの方のお世話になった。振り返ってみると、私の場合その時々で縁が存在していたようである。

若い研究者にはこれからさまざまな分野や立場にある多くの人と接し、縁を結んで行って欲しいと考えている。ただし、縁を結ぶということは、お世話になった人々と同じくらいムカツク方々にも出会うことであるのも否定はできない。

3. 人生の分岐で迷った時は最終的には自分で判断しろ（自分で責任を持て）

誰にとってもそうであるが例外なく私の人生にもその分かれ目になるイベントがいくつかあった。最初からそれが分岐点だとわかっていれば対処の仕方もあるが、そのほとんどは、後から考えて、もしかしたら人生の重要な分岐点であったのではないかと思うことが大半である。しかしおそらく、分岐点と認識されていないものもかなりあった。ただ、明らかに分岐点とわかる瞬間が何度かある。あるいは、それとわからなくても選択しなければならない瞬間がある。私の人生の分岐点としては、基礎系の大学院に入学したこと、助教として大学に残ったこと、違う道に行くことを考えて大学をやめようとしたこと、海外留学をしたことなどがあげられる。

いつの頃からか、人生の分岐で迷った時は、もちろん他人の意見を聴くことは重要であるが、最終的には自分でやりたい方（好きな方、楽しそうな方）に決めることにした。分岐のどちらを選んでもその後どこかで、あっちを選んでいれば良かったと思う時がくることも多い。どちらにしても後悔するならば、最終的には自分で判断して、他人のせいではなく、これは自分が判断した結果と割り切る方が精神的にも良いものである。ただし、これも度を超すと「あなたは好きなことばっかりやっていて幸せね」と妻に皮肉を言われる結果となるので注意が必要である。

4. 海外留学は行った方がよい

海外留学は行かないよりは行った方が良い。勿論、諸事情から留学できない方もいるし、留学経験がなくても立派な教育者や研究者が居ることも事実である。しかし、もし行けるチャンスがあるのならば海外留学は行った方が良い。

私の海外留学は非常に遅く、2006 ～ 2007 年の 44 ～ 45 歳の 1 年間、アメリカ合衆国ミシガン州のアナーバー市にあるミシガン大学歯学部に留学した。なぜ留学が遅くなったかというと、外国語でコミュニケーションをとることが非常に苦手だったことが最大の原因である。ただ、この年が海外留学の最後のチャンスだとは感じていたので、その他にもいろいろな行かない理由もあったが、最終的に自分で判断して準備を始めた。その当時に隣にあった微生物学講座 I 教授がなかなか留学に行かない私をとても心配してくれて、真夜中の研究室で、「研究できなくてもいいから、とにかく海外に行っておいで」と言ったことを今でも鮮明に覚えている。I 教授は「そんなこと言ったかなー」と憶えていらっしゃらないかもしれない。

案の定であるが、アメリカではコミュニケーションで苦労することになった。

・留学期間の途中まではコーヒーショップでカフェラテを注文しても、カフェラテではない別のコーヒーがでてきた。その時は「Welcome to America」と独り言を言っていたものである。
・マクドナルドに行って、英語で「セットの No.3」と注文したら、ハンバーガーのみが 3 つでてきた。英語ではセットとは言わない、コンボと言う。
・アイスコーヒーを注文すると「ほにゃらかミルクは必要か？」と高頻度で聞かれるので、とりあえず Yes と答えるが、アイスコーヒーの他にミルクは入っていない。何回聞いても分からないので、最後はミシガン大学日本語学科の大学生を連れって行って聞いてもらったら「Do you want room for milk?」と言っているんですよと笑って教えてくれた。room は space の意味があり、ミルクを入れるスペースは必要かと聞いているのであった。これを留学先で知り合った某歯学部歯周病学の S 教授に話したら、後に「この前、私も言われました。おかげで分かりましたよ。」と言われた。彼から感謝されたのは後にも先にもそれが最後であった。
・公衆歯科衛生のクラスメートのインドの歯科医師と中東の歯科衛生士に、「日本人がなぜ英語が得意じゃないかわかったわ」と言われたことがある。「なぜ」と聞いたら、「だって日本の大学は英語で講義してないんでしょ。私たちは教科書も英語だし」と言われた。

肉体的・精神的に辛いことや苦しいこともあったし、決して恵まれた環境では無かったが、たくさんの日本人の方々のお世話により、なんとか 1 年間の留学期間を過ごすことができた。終わってみれば楽しくて、懐かしくて、またすぐにでもミシガン大学に戻って来るぞと思っていたが、現実には日本に戻ると多忙になり 15 年以上経った今でも、ミシガン大学はおろか、アメリカにも行っていない。

5. 教授になること自体を目標にするな

教授（あるいは研究所長などの偉いポジション）になること自体が目的となってしまっている方がまれに若い方でもいる。結果としてそうなったのであればよいが、それが目的と化してしまうのは困ったことだと思う。もちろん、私が教授選考委員会に書類を提出したのは最終的には自分の意思である。

どうやって教授になるかということよりも教授になって何をするのかが重要である。また、これは自分だけかも知れないが、教授になってからは研究に費やす時間が非常に少なくなったことを感じる。教授というのはある種の管理職であり、純粋に研究だけを突き詰めてやりたい方は、なってみて自らの立場を疑問に感じられることもあるだろう。

6. 人は育てるものか育つものか（研究するなら今でしょ！）

教授選考委員会で「教授になって何をしたいのか」と訊ねられ、「人を育てます」と答えた。人を見る目がある人、ない人という話題がのぼることがあるが、そんな目というものはあるのだろうかとこの頃思う。私の教授経験によると、人は育てるものではなく、育つものである。

私にできることは、若い先生方にたくさんの「縁」を与えるようにすることである。残りのあと半分は本人の側の責任だと考える。仕事を明確にして渡し、あとは本人に任せることで十分である。大学院生であれば、できるだけ研究に没頭（集中）できる環境を作ってあげること（経済的支援を含めて）が重要である。大学院の 4 年間を通して集中して研究するということは得難い経験であり、人生において研究だけをここまで突き詰める期間はこの時をおいて他には無い。ノーベル賞受賞者も 20 歳代、30 歳代に行った研究で受賞しているように、この年代は研究者として最も研究に没頭

できる重要な時期である。

今思い返すと、これまでの35年間の大学院・教員（研究者）人生でたくさんの方々にお世話になり、自分ひとりでは決してできないであろうことを経験した。感謝の気持ちでいっぱいである。若い研究者である皆さんのこれからの研究者人生の少しでも参考になれば幸いである。